

丸亀城殺人事件

Rev. 1 2023 年 4 月 20 日

2023 年 2 月 20 日

土井湖南

2028 年の 4 月 4 日（火）、私・土井湖南は故郷の丸亀に帰郷した。4 月 5 日に開催される母校・丸亀高校の同期会に出席するついでに、讃岐国府跡と讃岐国の国司だった菅原道真ゆかりの地を高校の後輩で社会学専門の大学教授の友人・栗栖庸介と週末に巡ることになっている。我々が故郷にいたころにはすでに坂出市の府中町が讃岐国府の所在地だったと想定されていたそうだが、特定されていなかった所為か、一切知らなかった。1970 年以降続けられてきた発掘調査により、そこが讃岐国府の所在地と特定され、2020 年には国の史跡に指定されたそう。

庸介の年齢は私より一回り下だが、高校の OB 会で知り合い、古代史と史跡めぐりという共通の趣味で友人となった。そして半年ほど前「上総国分寺殺人事件」（その事件簿に二人の関係を詳述）で事件解決に一役買ったことがあるが、それ以前より警視庁の未解決事件の協力をしてきた人物だ。彼は東京の大学に勤務していたが、現在、大阪の大学との共同研究のために客員教授として 2 年間の予定で大阪に赴任中だ。

到着早々、富屋町のホテルで市街観光のガイドマップを手に入れ、市街地を散策する。コロナ感染症の終息宣言はどこからも発出されていないが、とっくに感染症法の「2 類相当」から「季節性インフルエンザと同じ 5 類」に引き下げられ、移動の制限はすっかりなくなっている。



丸亀に帰って来たのは久しぶりなので浜町、富屋町から本町、通町を散策する。

駅前にホテルが立ち並び、様相が異なってきている。浜町にはミヨシ屋楽器店がある。学生時代から見慣れてきた店だ。人々の生活をより豊かにする音楽には楽器店の存在が不可欠であり、今日のようにネット通販で楽器を購入するとしても、地域社会には楽器を演奏し、学ぶことができる場所が必要だ。それに楽器を調律し修理することも必要だ。単に楽器を販売し補修するだけではなく、そこで音楽教室を開き、子供達も含め、大人にも様々な楽器演奏のテクニックを教えている。ミヨシ屋楽器店は私の学生時代以前より今日迄の長きに亘って、そのためのインフラを提供し、地方創生、地域活性化に貢献してきている。



富屋町の金物店、洋品店やその他の商店がほとんどなくなっていて、ホテルとマンションが増えて、商店街の面影はすっかりなくなっている。本町の旧呉服屋の屋敷跡には介護施設が建設されている。駅に近く、諸施設も整っているので入居者にはとても便利だろう。通町には、かねこや靴店やスミレヤ化粧品店も健在であり、商店街の面影が残っているが、飲食店が増えつつある。駅近くに建設されたホテルの宿泊客やマンションの住民らを当て込み、市街に散逸していた飲食店が集まり始めている。観光目的やビジネスで来た旅行客には利便性が増すし、観光客の増加にもつながっているようだ。

かねこや靴店は下駄や草履から始まり、約 100 年にわたって市民の足元を支えてきている。



かねこや靴店



スミレヤ化粧品店

スミレや化粧品店も老舗である。定番の商品だけでなく、フェイシャルエステも
行っているようだ。目にする光景を懐かしみながら、街歩きを続ける。

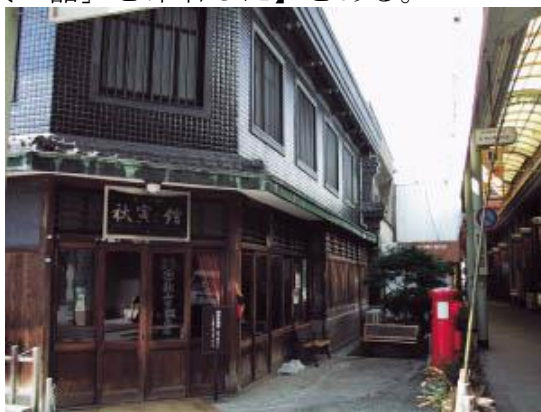
ガイドマップ





通町の「まちの駅、秋虎の館」（あきとらのやかた）に立ち寄る。商店街に残る旧き商家を訪れた人達の交流の場になっているのだ。お茶とお菓子の接待にあずかり、当番の方から、元社会科の先生だと自己紹介を受け、しばらく丸亀史を拝聴する。

資料には【大正時代末に「秋山寅吉商店」（旧本社）として建設された歴史的建造物の保存と丸亀の情報発信基地や観光客の休憩所としての活用、および周辺の旧市街地の再活性化を目的として 2002 年 12 月に丸亀タウンマネジメント推進協議会により、まちの駅として開設された。秋山寅吉商店の名前を借りて「秋寅の館」と命名した】とある。



猪熊源一郎美術館は何度か訪れているので今回はパスする。しばらく散策した後、食事処「一鶴」で、生ビールを飲みながら、胡椒の効いた若鳥に舌鼓を打って、早めに床につく。明日は同期会だ。

翌朝、ホテルの部屋から、石垣の城と称される丸亀城を眺望する。4層の石垣の高さはよそ 60 メートルとされている。現存 12 天守の一つであり、日本百名城にも選出されている。

そして標高およそ 420 メートルの讃岐富士の景色を楽しむ。讃岐富士は飯野山の別名である。新日本百名山にも選ばれ、地元の人に親しまれている。いずれもたまに見る所為もあるのだろうが、格別の感慨が湧く。



ホテル近くの喫茶店で朝食をとり、丸亀城に向かう。富谷町から、大手門に近づいて行くと、桜まつりの幟（のぼり）が見えてきた。普段よりはるかに人通りが多く、祭会場は賑わっているようだ。大手門の前で、40 歳前後と思われる女性に話しかけられる。「私は初めてこのお城にきたのですが、本当に美事な石垣で、とても感激しました。地元の方とお見受けしましたが、二の丸の井戸ってどこに有るのでしょうか？」と問いかけられた。私のラフな服装を見て、てっきり地元の住人と思ったようだ。その見立ては合っている。「ここには何度も来ているが、申し訳ないですがそれは知りません。」続けて「二の丸に行けば判るのではないのでしょうか？」と妙な返事をしてしまった。後で二の丸の場所を聞かれたのかもしれないと思ったが、そのまま忘れてしまった。

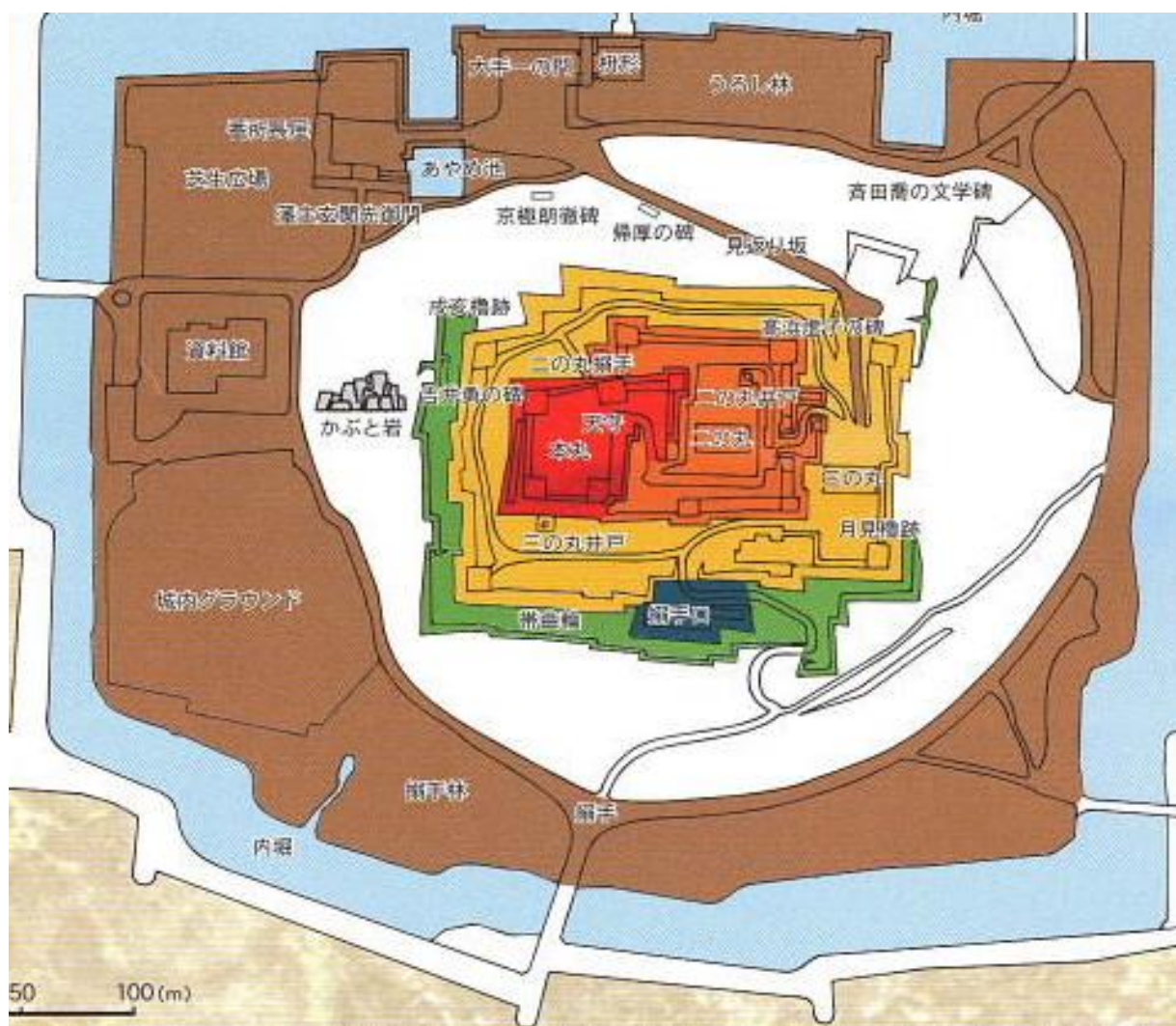


丁度「丸亀城桜まつり」の開催中で、亀山公園の桜は満開で、普段とは異なり、人出でにぎわっている。祭は毎年開催され、今年は 3 月 25 日（土）～4 月 16

日（日）の長期にわたり開催されると分かる。私は「丸亀城桜まつり」を知るのも見るのも初めてである。18歳で故郷を離れたが、その当時は開催されていなかったのかもしれない。

パンフレットによれば、【丸亀公園の約650本のソメイヨシノ、1500個以上のちょうちん、夜にはライトアップされた石垣や天守閣、月灯りとのコラボレーションで情緒あふれる雰囲気を感じることができる】とある。

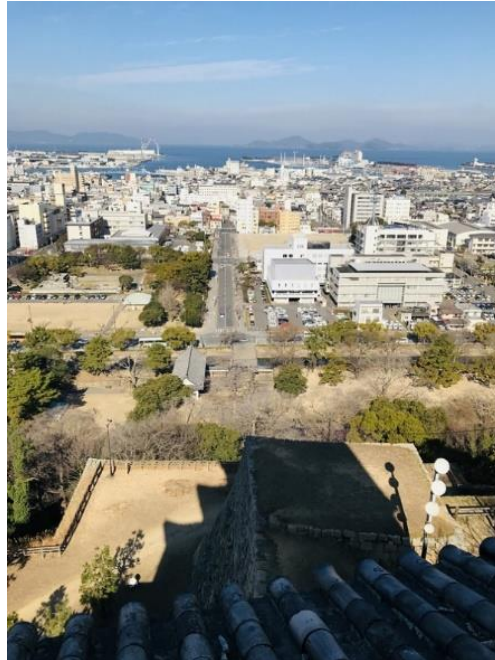
公園に入って、お花見を堪能した後で、いつものように天守閣に向かう。



見返り坂に来るといつも思い出す。野球部に在籍したのは短期間ではあったが、冬場は体力増強のために坂道ダッシュを繰り返したものだ。当時、練習は城内グラウンドで行ったが、現在は室内練習場も備わった専用球場で行っている。

帰省の度に上っているのだが、何度来ても感慨深い。台風で崩落した石垣はすっかり修理され、その美しい扇型の曲線がすばらしい。頂部は恰好の展望台であり、しばらくの間、市街と瀬戸内海の眺望を楽しむ。久しぶりに天守閣に登る。

市街と瀬戸内海の眺望



ホテルに帰って、一休みしてから同期会の会場に向かう。会場は「オオクラホテル丸亀」だ。「ホテルオオクラ」ではなく、地元の企業・大倉工業のグループホテルである。

今回は60名ほどが出席した。卒業後47年を経ているが、先生も御一人出席して頂けた。耳は遠くなっていたが、ご健在な姿を拝見して嬉しく思った。最近では自分の耳も遠くなっている。そのうちに補聴器のお世話になるかもしれない。

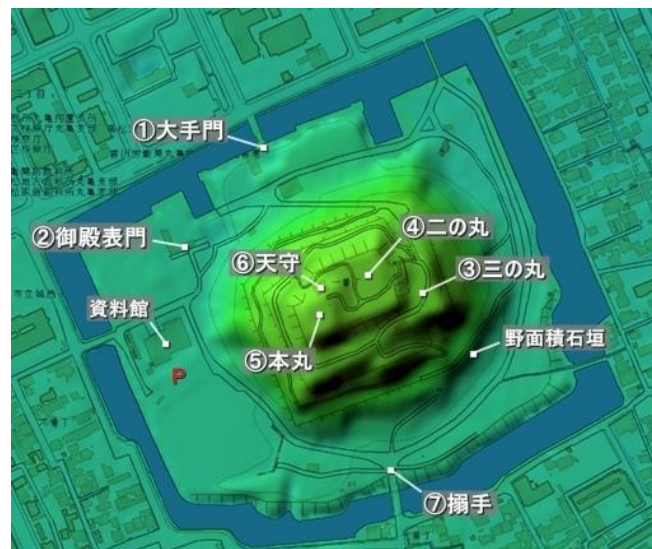
時々会う友人もいれば、名前をなかなか思い出せない人があるが、顔を見ながら話し合えるだけでも懐かしく、とてもうれしい。こうして会えるのはお互いに幸せなことだと思ってしまう。もう鬼籍に入ってしまった人、様々な理由で、参加したくても出来ない人も多いはずだ。ひと時の宴を楽しみ、三々五々解散したが、私はカラオケグループについて行く。20名ほどが参加した。普段はめったに歌わないが、流れで数曲を歌ってしまう。

ホテルに帰るが、すっかり酔ってしまったので、このまま寝るか、夜桜見物に行くか迷ったが、月も出ているので、今日のうちに夜桜見物に行くことにした。ホテルで一休みしてから20時ごろ、大手門から亀山公園に向かい、ライトアップされた桜見物を楽しむ。

ライトアップされた桜、石垣、そしてお城に昼間とは異なる情緒を味わった。



酔いも少し残っているので、酔い覚ましも兼ねてお城の周辺をもう少し歩いて余韻を楽しむことにする。満月とはいかないが 7 割の月灯りと外灯もあるので、歩くのに不便を感じない。資料館を過ぎて、搦手口（からめてぐち、裏門）から出た。さすがに人に会うことはなかった。



左に母校の校舎を眺めながら、国道沿いの歩道まで出て、それから 22 時過ぎにホテルに着き、シャワーを浴びて床についた。

翌日は早朝に起きて、JR 丸亀駅北側の丸亀港の方に向かう。「港のうちわミュージアム」の手前にある「うどんや」で朝食をとるためだ。うどん好きなので帰省したときは毎日のように食べる。その途中、港の入口にある太助灯籠（たすけとうろう）に立ち寄る。何度も来ている。

資料には

【太助灯籠は丸亀港が「こんぴら参り」の上陸港として賑わった頃の江戸講中（えどこうじゅう、江戸時代の講を作って神仏に詣でる仲間）灯籠である。4 千人近い寄進者のうち最高額を寄進した塩原太助の名にちなんで「太助灯籠」の愛称で親しまれ、現在も夜になると灯りが点されている。】とある。



「うどんや」は、早い時間帯の所為か、客は私一人だ。‘うわてん’をトッピングしたうどんを食べるが、美味だ。

ホテルに帰り、週末の栗栖庸介との「讃岐国府巡り」の為の資料の下調べを始める。

昼頃にフロントから電話があり、「丸亀署の刑事が来て、会いたいと言っている」とのことであった。取りあえず降りていくと、丸亀署の刑事が二人来ていた。女性の写真を見せられ、「この人をご存じですか？」と問われ、「知りません」と返事すると、納得いかないようで、「昨日、大手門前の防犯カメラにあなたがその女性と話をしているところが映っているが」と云われた。顔を覚えてはいなかったがその女性を思い出したので、大手門の前で二の丸井戸を問われた経緯を説明した。すると刑事は「昨日、お城で殺人事件があったので、その調査中です。昨日の 21 時ごろから 23 時頃までの行動を教えてください」と聞いて来た。死亡推定時刻なのだろう。すでにフロントに確かめて、その時間帯はホテルに不在だったことは調べがついているのだろう。また、夜になって大手門に入場したときのビデオもチェックしているのだろう。夜桜見物のルートと時間帯をそのまま説明した。刑事らは「しばらくこのホテルに留まって欲しいし、移動する場合は事前に我々に説明してください」と言って帰って行った。まだ容疑者から除外できないということのようだ。ビデオには私が公園から出ていくときの姿が映っていないので、搦手口（からめてぐち、裏口）から帰ったという説明には一応納得したのか、殺人を犯して、とっさに搦手口から逃げたと思ったのかは分からない。恐らく公園内や搦手口には防犯ビデオが無いのだろう。被害者が入場した様子がビデオに映っていたはずだが。

翌日の新聞で分ったことは「お城の二の丸で女性の遺体が発見された。朝 6 時ごろに散歩に来た人により発見された。被害者は、大阪市内の会社に勤める大阪在住の OL」と。

私はすぐにメールで栗栖庸介に折り返し電話をもらうように依頼した。その後折り返しの電話をもらったので、事件の状況と私の行動を説明して、「県警は

私が容疑者の一人」と見ているようだと話した。彼は「週末の国府巡りは延期して、私が事件とは無関係であることを明らかにして、早くすっきりできることを優先しましょう」と言ってくれた。

被害者の言った二の丸井戸を思い出し、ネットで検索する。【二の丸井戸はよくある井戸に見えますが、実は日本一の深さを誇る井戸になります！深さは約65mでビルディングやマンションでいうと約20階相当になります。天守は小ぶりに見えますが、高さが約15メートルもあります。四国の現存天守の中で最も古い1660年に作られたと言われています。】とある。

別の資料には【二の丸井戸。深さは絵図によれば三十六間(約65メートル)と記され、日本一深い井戸といわれています。石工職人・羽坂重三郎（はさかじゅうざぶろう）がつくり上げた、丸亀城の見事な石垣を見た城主（生駒親正という説や山崎家治という説がある）は、大いに喜びました。しかし、その城主の目の前で羽坂重三郎は、日本一の高さを誇る石垣をいとも簡単に登り切ってしまいます。その様子を見た城主は、羽坂重三郎に恐れ戦き、嘘の井戸調査を命じ、そのまま上から石を落として羽坂重三郎を殺害。それ以降、井戸の周りには羽坂重三郎の幽霊が出るという噂が広まった、という悲しい伝説が残されています。】と。



石工なら、誰でも石垣を簡単に登れるはずなので、これは後世の誰かによる作り話ではないだろうか？この伝説の意図は何だろうと不思議に思った。

そしてこの伝説に絡んで被害者が来たとすれば、その理由は何なのか？そして何故ここで殺されねばならなかったのか？犯人と被害者の接点は？いや、この伝説は事件とは無関係だろう。行きずりとは思えないので、男女関係のもつれにより発生した事件ではなかろうか？謎が深まるばかりである。

県警に自分への疑いが残されたままでは落ち着かない。早く犯人がつかまってくれとよいが、それには時間がかかりそうである。

7日（金）の20時ごろ、栗栖庸介が丸亀駅に到着した。活魚料理「一徳」で、海鮮料理を楽しむ。事件の話は、ホテルの部屋ですることにして、いつものように歴史談義をする。

彼が【以前から、不思議に思っていたことだが、利休切腹は専門家の間でも世間でも事実として扱われている。しかし、その根拠が分からないままである。

あるときにテレビでチャンネルを切り替えていたら、作家の伊東潤氏が司会者に「ところで利休は切腹したのでしょうか？そしてその根拠は？」と問いかけられ、それに対し「切腹したと思っている。切腹したとの当時の記録は見つかっていないが、江戸時代になって、利休の4世孫・千宗佐が書き残した「千利休由緒書」に「利休は切腹し、首を晒された」と書き残しているのです、そのように思っている。」と回答したと記憶している。どのような番組であったか、忘れた。

それまでは私も利休は切腹したものと思っていたので、調べることにした。それに最も著名な歴史家がテレビの歴史番組で「利休は切腹した」と根拠を示さずに断定した上で、切腹の理由は史料が残っていないが、石田三成等の五奉行らが台頭してきたこと、身分制度を明確化した秀吉政権にとって、武士でない利休が政権No.2として政権にいたことが疎ましくなっていたこと、それに鮮出兵に対して秀吉と意見の食い違いが生じたことも原因かもしれない。

そして3,000人ほどの上杉景勝勢が利休の屋敷を取り囲むシーンを監修していた。千宗佐の「利休由緒書」のとおりである。利休が表舞台から去った時に当時の人々が鵜の目鷹の目で、その消息を探し求めたが、このようなことは書かれていない。このことに対する考察を後世の誰かがしていないようだ。上杉勢や娘の話が信じがたいのに、切腹だけは信じろと言われても無理がある。

当時の記録は

・多くの日記等に「利休の木像が京の一条戻り橋で磔にされ、その罪は1. 大徳寺山門に安置された千利休の木像が不敬であったこと。2. 茶道具を法外な高値で売り、売僧（まいす）と成り果てていたことである」と立札に書かれていたと報告している。伊達家の家臣鈴木新兵衛はその光景を見た藩への手紙に書いている。内容は多くの人的一致しているので事実とすべきと思う。

他には

- ・利休が逐電した。
- ・利休が追放されて行方不明
- ・利休が屋敷を売り払い、高野山に登ったという風聞を聞いた。
- ・秀吉公が利休を処刑した。
- ・利休の首を木像とともに一条戻り橋に晒された
- ・利休が28日の朝、切腹したとの伝聞がある
- ・奈良で盗賊が捕らえられ、京都で晒し首になった

晒し首は盗賊のもので、木像と同じ場所だったので、利休の首と誤解された可能性がある。切腹の噂を聞いた多門院は高野山に登ったとも書いている。いずれも風聞である。切腹や晒し首であれば木像以上に京中の噂になるはずである。しかし、他の人が書いていないので、噂の一つでしかない。

- ・新たな茶道具を法外な値で売り払って利益を上げている。売僧の極みである。
- ・大徳寺の山門に利休の木像を置いたが、秀吉公もくぐることもあるので、上から見下ろすのは不敬に当たる。ということで切腹させられたことになるが、あまりにも重すぎる。

実際は政権 No. 2 とされていた利休が台頭してきた石田三成等にけむたがれ、秀吉の朝鮮出兵に苦言を呈したとされるので、政権から遠ざけられたことは十分にあり得るので、表舞台から去り、隠遁することで十分だったはずである。隠遁先は黒田藩説がある。

千利休由緒書は、

木像磔事件から約 50 年後に紀州徳川家の要請により表千家 4 代目の千宗佐が作成。利休の孫の千宗旦にヒアリングしたと。

- ・山門に置いた木像のことを秀吉に讒言され、秀吉の怒りを買って、木像を晒されたあと、屋敷を秀吉の命を受けた上杉景勝勢 3 千名に囲まれ、検使を迎え、切腹した。利休を取り返しに来る勢力を恐れたためとした。

罪は山門の木像を讒言され、秀吉の機嫌を損ねて咎を受けたが、詫びを入れなかった為である。それ以外に後家になっていた利休の娘が美麗だったので、秀吉が見染めて、差しだすように命じたが、応じなかったことも要因であると。

当時の記録と千利休由緒書が全く異なる。

- ・利休の屋敷が 3 千名ほどの兵に囲まれた話はこのときが初めてであり、もしそうだったとしたら、当時、木像を晒されたことより、もっとセンセーショナルな出来事だったはずなので、当時の誰もが記録に残していないはずは無い。それに絶対的な権力を有していた秀吉に逆らう勢力などなかったはずである。それにそのとき上杉景勝は京に居なかった。上杉景勝以外に多勢の兵を動かせる人物はいないはずである。

- ・売僧の話は書いていない。有名な話であり、実際に立札に書かれていたので誰もが知っていることである。利休は茶人の前に堺の商人なので安く買って高く売りつける習性は仕方がないと弁護する歴史家もいるが、千家の子孫にとっては不名誉なことと思い、書きたくなかったのだろう。

- ・利休の娘の話は 50 年後になって初めて出てきた。そのとき娘はすでに 30 歳過ぎの後家で 3 人の子持ちだった。それに利休の木像の顔からすると娘が突然変異のように秀吉の心を奪うほどに美麗だったとは信じがたい。

他にもっと若くて美形な女性をいくらでもはべらせることができたはずだ。

・晒された木像は現存して表千家に保管されている。切腹させられるほどの罪なら、木像も処分されていたはずである。

いずれにしても、著名な歴史家が利休は切腹したとしながら、その根拠に触れたがらない。切腹したという当時の記録がないことに対しても妥当な推論が必要だろうし、表千家4代目の千利休由緒書の疑問にも妥当な推論が必要なはずだ。切腹説を唱えてきた自分たちの過去に拘っているのだろう。

推測としては、

利休が秀吉の不興を買って、また五奉行の石田三成等の台頭勢力に政権から追われて、納得づくで、遁走させられた。遁走先は黒田藩とする説もある。極一部のしか知らないことであり、誰にも説明しないし、知っていても知らないふりをした。遁走したからこそ、人々はさまざまに憶測して噂を流した。

恐らく晒し首は盗賊のもので、場所と日にちが重なったので、利休の首と勘違いしたのだろう。

千家は徳川政権下で、天下にとどろくほどの栄達をしている。茶聖となった利休と千家の名誉を守ることを条件に由緒書を作成することを願い出て、了解してもらったのだろう。徳川幕府は評判が上がらず、相変わらず秀吉人気が高かったのもので、秀吉を非道の人とし貶める話は歓迎したと思われる。むしろ勧めたのかも知れない。】と。

彼の説は尤もだと思った。それにしても彼の記憶力にはいつも驚かされる。

私が【別の著名な歴史家がテレビのインタビューに対して、「19世紀前半に編纂された江戸幕府の公式史書の『徳川実紀』に‘家光の実母は春日局’と書いていることは知っているが、後に書かれた史料なので自分は信じない。『徳川実紀』には他にも明らかな間違いもある。」と言ったことに驚かされたことがある。

お江が家光の生母であったなら、150年～200年後になって、実は春日局が家光の生母だったと幕閣が『徳川実紀』にワザワザ嘘を書く理由などあろうはずがない。歴史家は嘘を書いたと言うなら、説得力のあるその理由を説明すべきではなかろうか？お江や徳川家の都合で生母はお江としていたが、そろそろ時効であり、周知の事実を正式に認めたということではなかろうか？それに、乳母の春日局が家光を育てて、命を懸けて奔走し、次期将軍に就任させて、女性として老中をもしのご権勢を得たとすれば歴史上稀なことであり、物語としては大変面白い。芝居とかで想像を絶する乳母・春日局の活躍を喧伝してきたこともあろう。春日局の権勢は周囲の誰もが実母と知っていたからこそ発揮できたに相違ない。『徳川実紀』の中に間違いがあるからと言ってその他の記述を信じないということは到底理解できない。

それとは反対に歴史家は利休切腹に対しては当時の史料に触れず、後の史料を正としている。その時々で使い分けているように見える。それとも自分たちの過去の論文を否定することになるので、史実の追求を避けているのだろうか？】と。（「偉人たちの史実と歴史小説の間」参照）

海鮮料理を十分楽しみ、胃をすっかり満たしたので、ホテルに帰る。
ホテルの部屋で早速事件の話にかかる。

彼のアクションは早かった。すでに、これまで何度も難事件解決に協力してきた警視庁の仲立ちで、彼が香川県警に協力することを条件に、情報を得ていたのだ。

彼の話は【死因は首を絞められたことによる窒息死で、強い力で首を絞めているので、犯人は男だろうが、着衣に乱れはなかった。死亡推定時刻は昨夜の 21 時から 23 時である。犯人特定につながるような物証は見つかっていない。被害者が 21 時頃に大手門から公園に入ったときのビデオには特徴のあるリュックサックを背負っていたが、それがなくなっている。駅前のホテルのカードキーが身に着けられたままだった。それですぐに身元が判明した。被害者は大阪在住の阪野さなえさん 42 歳で独身と判明した。貴重品類はホテルに残されていた。

男女関係のもつれによる事件が想定されるので、その線を重点的に捜査するそうさ。ちなみにあなたが 20 時過ぎにお城に入場した映像も確認されているそうさ。あなたと被害者の入城時間差に開きがあるが、あなたが捜査対象からまったく外れたわけではないそうさ。】と。

明日からの讃岐国府跡巡りは翌週に延期する。
翌日、二人で現場に出かける。

二の丸井戸周辺は立ち入り禁止になっているが、遠くから眺める限り何の変徹も無い。庸介は丸亀署に立ち寄り、城への他の出入り口や搦手口、それに国道沿いの防犯ビデオ、それに被害者が二の丸口に執着していたようなので、パソコンやスマホなどを調べたら、何か見えてくるかもしれないと県警に言い残して、大阪に帰って行った。

私はあと一週間、丸亀に滞在することになった。翌日、特にすることもないし、国府巡りが先延ばしになってしまったので、国府跡の下調べをすることにした。JR で丸亀駅から讃岐府中駅まで行く。讃岐府中駅から、徒歩で香川県埋蔵文化財センターに行く。

展示品を見てから、讃岐国探索マップとパンフレットをもらってそれに従って探索する。時間が十分あるので調べたことを書き留めて、週末に庸介が来た時に手渡すことにした。（まとめた資料「讃岐国府跡」を最後に添付）

翌週の金曜日、栗栖庸介が再び丸亀にやって来た。「一鶴」で会食して、ホテルで話を聞く。

「進展がない。しかし、捌手口から出た後の国道沿いの防犯カメラを確認してもらうように県警に依頼していたが、不審な人物は特定されなかった。あなたが捌手口から出た後で国道沿いを歩いていたところが防犯ビデオに映っていた。その時間が 21 時過ぎごろなので時間帯からしてあなたが殺人を犯すチャンスはあり得ないとのことで、あなたは捜査対象から外れたようだ。

県警は、通り魔的な犯行も視野に入れながら、男女の交際のもつれからの犯行だろうと絞り込み、交友のある男、あるいは一方的に好意を寄せる男を重点的に調べた。しかし、勤め先や知人関係を探っても男の影が見つからなかった。

捜査しているうちに、彼女は相当の歴女で、お城マニアと分かった。その関係のネットオークションにも参加している。趣味に熱中し、男には興味を待たないのだろうか？また Facebook に書きこみをしていることが判った。その中で、「丸亀城の古文書を手に入れました！お宝発見に丸亀城行くつもりです。桜まつりも楽しみでわくわくしています！」との書き込みが見つかり、今回の丸亀訪問の目的が判明した。旅先で男と待ち合わせしているような形跡は見当たらなかった。そこでネットオークションの参加者と、Facebook に「いいね！を押した閲覧者の中で一致する人物を調査するようにと県警に提案した。】

被害者が私に尋ねた’ 二の丸井戸 ‘とお宝の関連性、彼女以外に丸亀城のお宝を手に入れた人物の存在に着目したのだ。

事件が解決していないので、結局国府跡と菅原道真ゆかりの地を巡るのは 5 月のゴールデンウィークに延期し、一旦引き上げた。

5 月のゴールデンウィーク、私と栗栖庸介は丸亀に集合し、お食事処「新世」の個室を借りて、旬の魚料理に舌鼓を打つ。

彼より事件の経過説明がある。

【Facebook からは糸口が見つからなかったが、ネットオークションから糸口が見つかった。丸亀城に関する古文書のネットオークションに参加した人物は 12 名と判明した。意外と少ないのだ。そのうち、事件の日のアリバイの無い人物が 3 名いた。そのうちの一人、大阪市内在住の高尾浩太が、動機がありそうで且つ事件当時の行動が不審だったと判明した。彼はアルバイトをしているが、事件の当日、風邪をひいたとの理由で突然休み、3 日後に出社していた。古文書に興味を持ち、トレジャー・ハンターであることも判った。それまでも突然、休暇を取るの、仕事を辞めさせられて職場を転々としていることが判った。趣味を優先しているからであろう。事件直後、彼は丸亀駅の防犯カメラには映っていなかったが、高松駅の防犯カメラに被害者の特徴あるリュックを背負った彼の映像が確認されたので、逮捕に至った。リュックはすでに処分されていたが、彼の供述にもとづき、二の丸井戸から回収されたが、その古文書には彼の指紋が残されていた。

犯人・高尾浩太の供述

【自分はお城マニアであり、トレジャー・ハンターです。その関係の古文書も集めています。丸亀城の古文書は、ネットオークション時、内容は今一つ分からなかったが、オークションに参加した。が、落札できなかった。後日、彼女の Facebook に「丸亀城の古文書をネットオークションでゲット！丸亀城桜まつりに合わせてのお宝発見の旅が待ち遠しい！」のような書き込みを見て、彼女がオークションで丸亀城に関する古文書を手に入れたことを知りました。彼女とは特に面識があったわけではないですが、それ以前に「古文書とお宝」のオークション会場で見かけたことがありました。彼女はマニア間ではよく知られた存在であり、オークションの会場で、参加者の一人が得意そうに彼女の名前と勤め先とかの個人情報を話しているのを偶然聞いたことがありました。

丸亀城の古文書が単に欲しいと思っただけでなく、トレジャー・ハンターとしての血が騒ぎ、いざというときの軍資金のありかを示すお宝ではないかと思い始めて、どうしても手に入れたくなってしまいました。

彼女の勤める会社が分かっていたので、退社時を張り込み、出てきた彼女の後をつけて自宅を突き止めました。丸亀城桜まつりの期間、自宅の張り込みを行いはじめ、4月4日の朝、彼女が旅仕度で出てきたので、そのままつけていきました。予想通り、丸亀にたどり着いたのです。

どうしてそこまでするのかということが疑問かもしれませんがね。常人にはトレジャー・ハンターを理解できないでしょうが、お宝探しに一生をかけて何も成果を得られずに一生を棒に振ってしまう方も数多くいますが、それでも自分の人生を納得しています。私はその人たちの足元にも及びません。

彼女がホテルから出てくるのを待って後をつけたら、丸亀城の大手門から城内に入って、二の丸井戸に行きました。ここがお宝のある場所だと確信しました。彼女が帰り始めたので、さらに後をつけていったら、彼女がホームセンターに立ち寄り、ロープとヘッドランプを購入したので、夜になってから出直すのだと確信しました。夜になって、二の丸井戸に先回りして、古文書を奪うつもりで覆面をして張り込んでいました。

彼女がやってきて、ヘッドランプとロープを取り出し、丸めた古文書のような巻物を取り出したので、それを奪い取ろうと突進し、しばらくもみ合いになりながら、やっと取り上げたが、直後に奪い返され、井戸に投げ入れられてしまいました。井戸水に濡れると字が消え、お宝の場所が分からなくなってしまうと思い、カッとなって、彼女の首を絞めてしまいました。ヘッドランプとロープをリュックに詰め、持ち去りました。他人に顔を見られるのを避けるために、人出が少ない搦手口から逃げました。翌日、バスで高松まで出て、それから JR で大阪に帰りました。警戒が厳しいので、ほとぼりが冷めるのを待ってから、古文書とお宝

探しをするつもりでした。被害者の阪野さなえさんには本当に申し訳ないことをしてしまいました。】

犯人の自白にもとづき、井戸の中を調べると幸いにも古文書は途中の雑草にひっかかっている水没を避けていたので、解読することができた。天守閣からの抜け道の出口が井戸の中にあると書かれていたので、調査したが、それらしき形跡は発見できなかった。古文書の作成年は 1660 年であり、築城の時期と合致している。抜け道が存在していたが後に塞がれた可能性もあるので、古文書は本物かもしれないと思われる。それに抜け道を秘密にするために石工を殺害したのであれば、伝説の裏付けが増してくると思われる。しかし、全くの贋作なのかも知れない。今後の調査が待たれる。

被害者のお宝は抜け道そのものであり、それ以上の期待はなかったはずだ。それにしてもトレジャー・ハンターのお宝に対する狂気、そのために偶発とはいえ、殺人まで犯してしまう狂気には本当に驚かされる。

事件が解決したことが判ったので、明日から庸介と一緒に歴史談義をしながら讃岐国府跡と菅原道真ゆかりの地を巡ることにする。とても楽しみだ。

資料「讃岐国府跡」

1. はじめに

讃岐国府の所在地については、江戸時代以来、何人もの人がその場所を探し求めてきたが、長い間特定することはできなかった。が、国司だった菅原道真の漢詩集『管家文草』（かんけぶんそう）その他により、坂出の府中町に国府があった可能性が高いとされ、1922 年（大正 11 年）には府中町に讃岐国府跡碑が建立された。

讃岐国府跡碑

大正 11 年に建立



○国府候補地周辺の地図



2. 発掘調査

(1) 国府の西にあったとされる開法寺跡の発掘調査

讃岐国の国司だった菅原道真之が、『管家文草』で国府の西の開法寺について触れている。

香川県埋蔵財文化センターの資料によると

【1970 年（昭和 45 年）, 府中町本村地区にて古代寺院の塔跡のものと見られる礎石群が発見された。塔の中心にあり, 中央に二重の孔を持つ心礎（しんそ）の他, 心礎を囲む 4 本の四天柱（してんばしら）, さらに外側にある 12 本の側柱（がわばしら）と, 塔を構成する礎石がすべて良い状態で残っており, 貴重な遺跡であるため, 同年県指定史跡に指定された。同時に発掘された瓦から, 白鳳時代（7 世紀後半の大化改新から 8 世紀初めの平城京遷都まで）の建立であると見られている。

この地域にかつての国府があった可能性が高いこと, 菅原道真の漢詩集『菅家文草』中に, 国府の西にある開法寺という寺院について触れた記述のあることから, この開法寺の塔跡ではないかとされた。

2020 年に発掘調査した開法寺跡の写真



(2) 国府跡の発掘調査

香川県埋蔵文化財センターの資料によると

【讃岐守を務めた菅原道真の漢詩集『管家文草』の記載や周辺の地割の検討などから、周辺施設や景観も含めた国府研究が早くからなされてきました。2011 年（平成 23 年）からは香川県教育委員会による開法寺東方地区の発掘調査が開始され、国府成立以前の 7 世紀中葉から廃絶後の 13 世紀にかけての遺構が検出されました。それによると 7 世紀後半には、初期讃岐国府か阿野評家、史跡城山（きやま）の関連施設等の可能性が指摘される正方位を指向する官衙（かんが、役所）関連遺構が出現し、8 世紀前半には条里地割方向の規則性が高い施設が現れました。そして、8 世紀中葉から 11 世紀にかけては、大型建物をはじめとする複数の掘立柱建物からなる方 1 町程度の区画が現れ、建て替えを繰り返しながらも長期にわたって維持されます。11 世紀中葉から 13 世紀になると、井戸を有する一辺 40 メートル程度の屋敷地が 3 ブロック確認されるようになります。7 世紀中葉から 13 世紀にかけての国府域の変遷を知ることができるとともに、『管家文草』の記載や付近の地割などから国府とその周辺の景観を復元するための情報にも恵まれており、古代国家による地方支配の実態を知る上で極めて重要な遺跡です。

讃岐国府跡で見つかった
大型建物跡



2020 年、讃岐国府跡が**国の史跡に指定**されました！これは、讃岐国府跡が、日本の古代の歴史を明らかにする上で重要であり、学術上、特に価値が高いと評価されたからです。これまで 30 年以上発掘調査に取り組み、当時の香川県で最大規模の建物群や貴重な出土品を発見しました。】

香川県埋蔵文化財センターの資料によると、史跡等の文化財に指定されると学術調査がなされる。

【平壤宮跡や藤原跡など、範囲が判明し、その重要性が指摘されている遺跡は、特別遺跡や史跡などの文化財指定がなされ、学術調査がなされる。

建築物を建てる際や道路、鉄道などを通す際の土地の再利用の際に破壊が予測される遺跡を記録保存するために地方公共団体、財団法人の埋蔵文化財調査事業団もしくは埋蔵文化財センター、地方公共団体が大学教授などに依頼して組織された発掘調査団、遺跡調査会などがおこなう発掘調査を特に緊急発掘調査（あるいは単に緊急調査）と呼ぶことがある。】

香川県埋蔵文化財センター資料によると

【当センターでは、令和 3（2021）年度から 5 カ年の間、讃岐国府跡調査事業を実施しています。引き続き、讃岐国府の中に点在すると想定される、国庁（国府の中心施設）や国司館（こくしやかた、国司の官邸）をはじめとする様々な施設の位置などを明らかにするとともに、現在推定される国府域の外縁部の状況を把握してゆく予定です。これらの成果は、讃岐国府跡が多くの方々に親しまれる場所となることを目指して、将来の保存や活用に生かしていきます。】とあり、現在も学術調査が行われている。

○「讃岐国府の建物配置の想定



9世紀～10世紀の建物配置の想定図

[illegible]

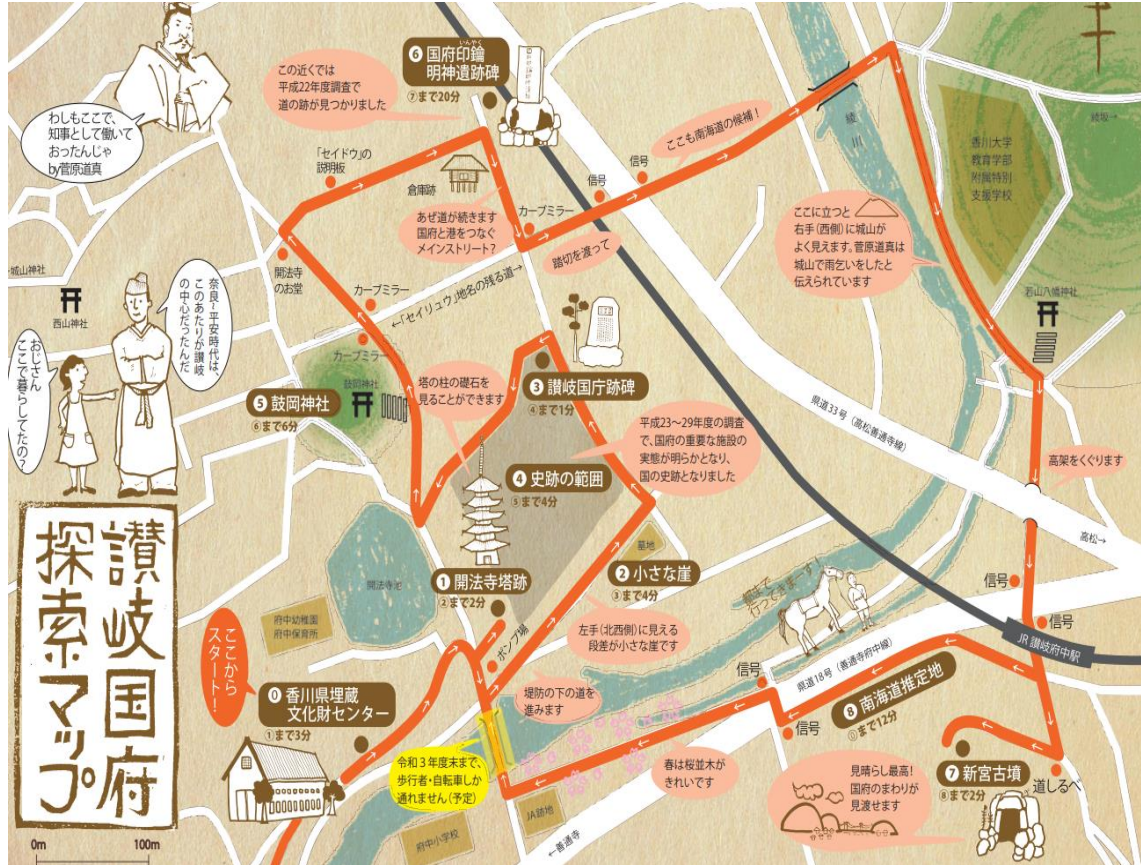
惣社が国府の北方約 5.5 キロメートルのところに鎮座している。惣社は平安時代に諸社を国衙（こくが）・国府近くに合祀したものとされ、第一義的には国衙における神事執行施設であった。また惣社では国司の着任儀式が行われたことが知られ、国衙行事の重要な施設でもあった。

資料によると

菅原道真が国司として政務を執っていた讃岐国府があったとされる場所です。現在も発掘調査が進められています。

讃岐府中駅から徒歩 15 分

○讃岐国府探索マップ



*明神原遺跡

菅原道真が讃岐の国司を努めていたとき、城山の神に祭文をよみあげ、雨乞いをした場所と伝えられています。

鴨川駅から車で約 20 分

*城山神社（きやまじんじや）



式内大社（しきないたいしゃ、平安中期，延喜式神名帳に記載された神社）といわれる由緒ある神社で、讃岐国を統治したとされる国造神櫛王（くにのみやつこかみくしのみこ、日本書紀の神櫛皇子は讃岐国造の始祖としている）が祀られています。菅原道真が祀った請雨天神社（あまごいてんじんじゃ）が境内にあります。

讃岐府中駅から車で約8分



* 開法寺塔跡

菅原道真の漢詩集「管家文草」中に、「開法寺は国府の西にある」と記述があり、讃岐国府の場所を特定する根拠の1つになっています。

現代の開法寺



讃岐府中駅から徒歩15分

＊黒岩天満宮



菅原道真を祭神とする神社で、学問の神様として多くの参拝者が訪れています。888年に大旱魃の際に、菅原道真がこの地で降雨に感謝する祈りを上げたといわれています。それ以降、この地に祠を建て、祈雨所として菅原道真を祀ったといわれています。

八十場駅から車で約20分

＊天満神社（石井天満宮）

菅原道真が国司として在任中、南山と呼ばれる山を気に入り、よく足を運んでいたそうです。

その南山に菅原道真を祭ったのがこの神社のはじまりといわれています。

讃岐府中駅から徒歩15分



＊犢山天満宮（すすむやまてんまんぐう）

菅原道真は、風光明媚な場所に松山館と呼ばれる別荘を持っていたようです。それがこの地だったといわれ、後に祠を建てて祀ったという起源があります。

八十場駅から車で約 10 分
ぜひ坂出にゆかりある偉人の史跡を訪れてみてくださいね。
歴史ロマンに触れることができますよ ♪



天満宮の祭神である菅原道真は 886 年から 890 年の間、讃岐守として讃岐国に赴任している。当天満宮が鎮座している場所は、かつて讃岐国国府の官舎（有岡屋形）が存在した場所といわれている。

毎年 8 月 25 日に行われる滝宮の念仏踊は、重要無形民俗文化財に指定されている。また、香川県で最も有名な学問の神様として多くの参拝者を集める。

886 年、菅原道真が讃岐守として讃岐国に赴任する。讃岐国国府（現・坂出市府中）に近い瀧宮の有岡屋形と、讃岐国一宮の田村神社に近い坂田郷（現・高松市上天神）の橋詰屋形の 2 箇所の官舎に住んでいたという】

田村神社



5. 菅原道真

とても語り尽くせないなので、ウィキペディアの記事にて簡単に紹介する。

菅原道真（すがわらの みちざね、845 年～903 年）は平安時代の貴族、学者、漢詩人、政治家。参議・菅原是善の三男。官位は従二位・右大臣。贈正一位・太政大臣。

忠臣として名高く、宇多天皇に重用されて、寛平の治を支えた一人であり、醍醐朝では右大臣にまで上り詰めた。しかし謀反を計画したとして（昌泰の変）、太宰府へ大宰員外帥として左遷され現地で没した。死後怨霊と化したと考えられ、天満天神として信仰の対象となる。現在は学問の神、受験の神として親しまれる。大宰府天満宮の御墓所の上に本殿が造営されている。

○菅原道真の主な出来事

年度	主な出来事
845 年	道真、生誕
877 年	道真、文章博士（もんじょうはかせ、官僚の養成機関である「大学寮」で歴史の学科である「紀伝道」の教官）に就任する。
886 年	道真、讃岐守
887 年	正五井位下
890 年	讃岐守, 徳替（とくかえ、任期を終えて交替）
895 年	道真、近江守、権中納言
899 年	道真、右大臣
901 年	道真、大宰権帥（だざいのごんのそち、太宰府の長官代理）に左遷される
903 年	道真、薨去

参考資料

- ・ウィキペディア
- ・香川県埋蔵財文化センター
- ・坂出市ホームページ

以上